

宋刊一切経に関する一、二の問題

——我邦舶載東禪寺版の「刊・印・修」の問題を軸に——

牧 野 和 夫

はじめに

本稿は、二〇〇四年五月十四日（金）京都国立博物館会議室にて行った、科学研究費特定領域研究（A）「東アジア出版文化の研究」C・D班の共催による公開研究発表会「南禪寺展にちなんで」と題しての席上で論文を配布し、発表した内容である。

我邦舶載東禪寺版の刷印時期について、「刊・印・修」の問題を軸に、その徴証を探りつつ、併せて、金沢文庫保管称名寺蔵宋刊一切経の調査に従事された野沢氏の命名にかかる「混合帖」の実態の一端を東寺蔵宋刊一切経に即して説明しようとしたものである。

その後の調査研究の進展を報告する際に、既に説明を了えた知見として言及することも多いが、当日、会場などで少部数の資料配布のみにとどまるものであった。「参照」の便を考慮し、ここに改めて印行する。

二〇〇四年以降の管見に入った論考なども含めて、若干の注記を末尾に附した以外は、発表当時のままの内容である。

一、我邦舶載東禪寺版の刷印時期について

先学の研究によって、現在のところ確認できる宋刊大蔵経の刷印時期について、得られる知見を列記すると、次の如きものとなる。

王公祀堂本 紹興壬午（32年）1162）施入印造記

梶浦晋氏「日本現存の宋元版『大般若経』—

剛中玄柔将来本と西大寺蔵積砂版を中心に

—」参照

高野山勸学院蔵本 淳熙己亥（6年）1179）補刻

1189頃（安撫買侍郎）施財刊

記ナシ）

水原堯榮氏「勸学院宋版一切経目録」（『水原

堯榮全集』第四卷 同朋舎 昭和56・12刊）

参照

（知恩院蔵本・淳熙己亥（6年）1179）補刻記、未確

認。但し、「丁亥」「戊子」あり。後述の如く、「丁亥」「戊

子」は、それぞれ1167・1168に該当するか）

（中尊寺蔵本・紹興14年（1144）施入墨識語

中村菊之進氏「宋明州王公祀本大蔵経考」

（『文化』昭和56・6）

a 王公祀堂本の位置

王公祀堂本については、前述の梶浦晋氏の論考に従うべきであるが、管見に入った王公祀堂本六帖を、他の宋刊大

蔵経の同一帖に比較し、ほぼ毎帖に捺印（かと思われる）

された施入識語の年号「紹興壬午」（紹興32（1162）

年）頃の印造と考えられることについては牧野「我邦舶載

東禅寺版の刷印時期についての一事実—東寺蔵一切経本東

禅寺版と本源寺蔵一切経本東禅寺版の刷印時期—」（『ナ

オ・デ・ラ・チーナ』6号（東アジア出版文化の研究〈文

科省科研費特定領域研究〉）・「日本舶載東禅寺宋版一切経

ノ内『大般若波羅蜜多経』を軸に—」（二玄社『東アジア

出版文化研究 にわたずみ』）等で記述しているので参照

願いたい。「比丘法悟捨銭開板」の補刻記の他に補刻記を

見ず。東禅寺版に多く認められる「広東運使寺正會置捨」

や「安撫買侍郎捨」が、全く存在しない。淳熙己亥（1179

年）以前の刷印である。

一例を挙げておく。

なお、表記上の凡例を記す。①・②は、第一板・第二板

を示し、その下方の「求」「用元」はその板の刻工名を指

示し、□は欠損や摩滅による判読不能の文字の存在を示し、

「ナシ」は刻工名の無いことを示す。「広東運使寺正會置

捨」「囊山院僧祖琦捨」は、捨財刊記を表記するものであ

る。網掛けは、比較対照上、留意すべき重要箇所であるこ

とを示す（これ以降使用の対照表も断らない限り同様の表

記を行う）。

京都大学附属図書館蔵

金沢文庫保管

大般若波羅蜜経三百九十八卷

同巻

- ① 求
- ② 用元
- ③ ナシ
- ④ ナシ
- ⑤ 純刀
- ⑥ 林明
- ⑦ ナシ
- ⑧ 俊
- ⑨ 溢
- ⑩ 亥
- ⑪ ナシ

竜門文庫蔵
同経五百四十六卷

- ① 正
- ② 王保
- ③ ナシ
- ④ ナシ
- ⑤ 先
- ⑥ 亨「比丘法悟捨錢開板」
- ⑦ 深
- ⑧ 蔡純刀
- ⑨ 溢
- ⑩ 俊
- ⑪ 蔡純刀

- ① 求
- ② □
- ③ ナシ
- ④ 聳「広東運使寺正會圖捨」
- ⑤ ナシ「囊山院僧相捨捨」
- ⑥ 召「広東運使寺正會圖捨」
- ⑦ ナシ
- ⑧ 俊
- ⑨ 溢
- ⑩ 亥
- ⑪ 俊

金沢文庫蔵
同卷

- ① 正
- ② ナシ「広東運使寺正會圖捨」
- ③ ナシ
- ④ ナシ
- ⑤ 文
- ⑥ □
- ⑦ 深
- ⑧ 王生
- ⑨ 溢
- ⑩ 浚「広東運使寺正會圖捨」
- ⑪ □「淳熙己亥閩縣倪嗣保安影捨」

- ⑫ 蔡純刀
- ⑬ 蔡純刀
- ⑭ 宗「比丘法悟捨錢開板」
- ⑮ ナシ
- ⑫ 文
- ⑬ 全
- ⑭ 宗「比丘法悟捨錢開板」
- ⑮ ナシ

b 金沢文庫蔵本（弘長元年 へ1261）定舜将来…高

橋秀栄氏指摘）と書陵部蔵本（淳祐十一年

へ1251）の補刻記・中村一紀氏指摘）の関係

京都大学附属図書館蔵本と金沢文庫保管本との刷印の先後について既に幾度かふれることのある刻工対照表を掲示する。

『大般若波羅蜜多經』卷64の第8板、金沢文庫保管の印面摩滅甚だしく、刻工名判読不明な板が、書陵部本では、「日本国僧行一捨板十片／都総僧可森化縁三十片」との印面清爽の板に改まっている。

大般若波羅蜜多經卷六四洪（7）東禪寺版

金沢文庫保管 書陵部蔵

- | | |
|------------|------------|
| ① 太 | ① 太 |
| ② 聳 | ② 聳 |
| ③ 俊 | ③ 俊 |
| ④ 宗 | ④ 宗 |
| ⑤ 昌 安撫買侍郎捨 | ⑤ 昌 安撫買侍郎捨 |

- ⑥ 賈侍郎捨 仲
- ⑦ ナシ
- ⑧ 日本国僧行 捨板十片 第1・2面ノド
- ⑨ 賈侍郎捨 文
- ⑩ 賈侍郎捨 仲
- ⑪ 立
- ⑫ 吳
- ⑬ 太

都繪僧可森化縁 十片(第3・4面ノド)

- ⑥ 賈侍郎捨 仲
- ⑦ ナシ
- ⑧ 日本国僧行 捨板十片 第1・2面ノド
- ⑨ 賈侍郎捨 文
- ⑩ 賈侍郎捨 仲
- ⑪ 立
- ⑫ 吳
- ⑬ 太

但し、書陵部本は、「法華山寺」捺印の帖とそうでない帖とを区別すべきか、問題は残る。

c 醍醐寺蔵本(淳熙十六年へ1189)の補刻記:
『新指定重要文化財 8 書跡・典籍 古文書Ⅱ』
〈昭和58毎日新聞社刊〉指摘)と本源寺蔵本(端平元年へ1234)の補刻記:牧野指摘)の関係

醍醐寺蔵宋刊一切経については、淳熙十六年(1189)の補刻記が知られている。醍醐寺本宋刊一切経は、寺外に散見されるものがあり、天理大学附属図書館蔵『大寶積経』卷第一百七、一帖は、その方形印二顆と、削擦消の旧蔵印一顆の枠から判断し、醍醐寺旧蔵の宋刊一切経の内の一帖と判明する。同経同卷の一帖が、三聖寺旧蔵本で本源

寺が現蔵する東禅寺版である。両者の刻工名・捨財記を対照したものである。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 天理大学付属図書館蔵(醍醐寺旧蔵)蔵 | 本源寺(三聖寺旧蔵)蔵 n・124 |
| 『大寶積経』卷第一百七(東禅寺版) | 『大寶積経』卷第一百七(東禅寺版) |
| ① 林国華 | ① ナシ |
| ② 林国華 | ② 林国華 |
| ③ 林国華 | ③ 林国華 |
| ④ 陳孟 | ④ 安撫賈侍郎捨 求 |
| ⑤ ナシ | ⑤ 唐/廣東運使寺正曾顯捨 |
| ⑥ 安撫賈侍郎捨 俊 | ⑥ 安撫賈侍郎捨 俊 |
| ⑦ 泉州施主捨 | ⑦ 泉州施主捨 |
| ⑧ 賓 | ⑧ 賓 |
| ⑨ 正 | ⑨ 正 |
| ⑩ 鄭容為 妣翁二娘 捨 | ⑩ 鄭容為 妣翁二娘 捨 |
| ⑪ 「福州東禅経/生陳宥印造」 | ⑪ 「葛□印造」。 |

天理大学付属図書館蔵本は、首に単枠方印「能仁禅寺大蔵」、下に単枠方印「東禅」。眉上横向きに単枠印「(削り消つ)」、枠の「切れ」、内のりの寸法などから、おそらく「醍醐寺」と思われる。醍醐寺旧蔵本・三聖寺旧蔵本の、いずれも第6板の第1・2面間のノドは、「文 七卷 六 安撫賈侍郎捨 俊」となっているが、第4板第1・2面

問ノドは、醍醐寺旧蔵本「陳孟」から三聖寺旧蔵本「安撫賈侍郎捨 求」になっており、「安撫賈侍郎」施財によって、醍醐寺旧蔵本の刷印時期以降、三聖寺旧蔵本の刷印時期までに刻工「求」の手に係る第4板の補刻を行っていることになる。醍醐寺蔵本には、淳熙十六年（1189）の補刻記がある（『新指定重要文化財 8 書跡・典籍 古文書Ⅱ』昭和58毎日新聞社刊行）。

本源寺蔵『十誦律』卷第二十六（東禪寺版）17板第1・2面問ノドに「甲午冬経司換」、東寺蔵本も同じ。「甲午冬経司換」の「甲午」は、端平元年（1234）に該当する。本源寺蔵宋版一切経、更に東寺蔵宋版一切経の内の東禪寺版について観るに最終補刻の時期は、端平元年、1234年である。

淳熙十六年（1189）以降（正確には天理大学蔵『大寶積経』卷一百七刷印以降）本源寺蔵（三聖寺旧蔵）本の最終補刻の時期端平元年（1234）までの間に「安撫賈侍郎」施財資金による補刻が行われたことになる。知福州在任期間以降のようであるが、特異なことではない。東寺蔵『大般若波羅蜜多経』卷276（東禪寺版）の第6板に「歳 六卷 安撫賈侍郎捨 丙辰 泗」ともあり、「丙辰」は慶元二年（1196）に該当し、勿論、知福州在任期間の補刻ではない。「施財時期」と「施財資金による補刻時

期」と「施財資金による墨訂箇所への施財刊記追彫時期」という二つの種別を設定する必要があるのかもしれない。「廣東運使寺正曾噩捨」についても同じことがいえるが、後でふれる。「広東運使寺正曾噩……紹熙四年（1193）に登第。……広東運判（発運判官或いは転運判官か）に達し、宝慶二年（1226）、六十才にて卒。」（中村菊之進氏「宋福州版大藏経考（二）」『密教文化』153号1985）と確定し、「広東運使寺正曾噩」が「宝慶二年（1226）、六十才にて卒」していることが知られる。

d 東寺蔵本（端平元年へ1234）の補刻記：牧野指摘）と本源寺蔵本（端平元年へ1234）の補刻記：牧野指摘）の関係

東寺蔵宋刊一切経の内、東禪寺版には瑞平元年（1234）の補刻記があり、本源寺蔵宋刊一切経の内の東禪寺版にも同じく瑞平元年（1234）の補刻記が存する。ほぼ同時頃の印造であるが、次の如き些少の異なりがある。三例を挙げる。

- 東寺蔵佛説大方廣十輪経 本源寺（三聖寺旧蔵）蔵 書陵部蔵
卷第一（東禪寺版） 同経卷第一（東禪寺版） 同経卷第一（開元寺版）
- ① ナシ ① ナシ ① 陳堯

⑪ ナシ
⑩ ナシ
⑨ ナシ
⑧ ナシ
⑦ ナシ
⑥ ナシ
⑤ ナシ
④ ナシ
③ ナシ
② ナシ

⑪ ナシ
⑩ ナシ
⑨ ナシ
⑧ ナシ
⑦ ナシ
⑥ ナシ
⑤ ナシ
④ ナシ
③ 陳賜
② ナシ

⑪ 郭寔
⑩ 吳彬
⑨ 陳默
⑧ 卓免
⑦ 王雄
⑥ 王康
⑤ 陳晶
④ 郭受
③ 陳賜
② 葉閏

東寺藏佛説大方廣十輪經
卷第三(東禪寺版)

⑫ ナシ
⑪ ナシ
⑩ ナシ
⑨ ナシ
⑧ ナシ
⑦ ナシ
⑥ ナシ
⑤ ナシ
④ ナシ
③ ナシ
② ナシ
① ナシ

本源寺(三聖寺旧蔵)
同経卷第三(東禪寺版)

⑫ ナシ
⑪ ナシ
⑩ ナシ
⑨ ナシ
⑧ 吳彬
⑦ ナシ
⑥ ナシ
⑤ ナシ
④ ナシ
③ ナシ
② ナシ
① ナシ

書陵部蔵
同経卷第三(開元寺版)

⑫ 林立
⑪ 蔡完
⑩ 王賢
⑨ 陳晶
⑧ 吳彬
⑦ 丁光
⑥ 郭華
⑤ 李完
④ 周遂
③ 陳通
② 吳浦
① 陳賜

⑬ ナシ

⑬ ナシ

⑬ 丁助

東寺蔵 大集須彌藏経卷上(東禪寺版)
本源寺蔵(三聖寺旧蔵) 同経卷上(東禪寺版)
書陵部蔵 同経卷上(開元寺版)

① ナシ
② ナシ
③ ナシ
④ 沂/廣東運使寺正會醜捨
⑤ ナシ
⑥ ナシ
⑦ ナシ
⑧ 廣東運使寺正會醜捨/周仲
⑨ ナシ
⑩ (不明)
⑪ ナシ
⑫ ナシ
⑬ ナシ
⑭ ナシ
⑮ ナシ

(3面6行下) (3面6行下)

① ナシ
② 郭華
③ ナシ
④ 沂/廣東運使寺正會醜捨
⑤ ナシ
⑥ ナシ
⑦ ナシ
⑧ 廣東運使寺正會醜捨/周仲
⑨ 鄭習
⑩ 官一娘
⑪ ナシ
⑫ ナシ
⑬ ナシ
⑭ ナシ
⑮ ナシ

いずれも、東禪寺版の破損・磨滅した板木一版分を開元寺版印刷葉で補配した例か、と考えられる。

東寺蔵『大方廣十輪經』卷一は、第3板を書陵部蔵同卷

第2板に認められるように、「陳賜」の手がけた開元寺版同経同巻第3板の印造葉で補っている。陳賜は、開元寺版の刻工であり、書陵部蔵本が逆に陳賜の補刻した東禪寺版同経同巻第3板を転用したとは考え難い。『大方廣十輪經』巻三の第8板や『大集経須弥藏経』巻上第2板も同じケースである。では逆に東寺蔵本の東禪寺版に、開元寺版の印造葉を配した、こうしたケースがないことはない。

東寺蔵

維摩詰所説経卷下（東禪寺版）

- ① 一才
- ② 樹 下卷 二 王佑刀
- ③ 樹 下卷 三 王生
- ④ 樹 下卷 四 方
- ⑤ 樹 下卷 五 付先刊 廣東蓮使寺正曾噩捨
- ⑥ 樹 下卷 六 王祐刀
- ⑦ 樹 下卷 七 達
- ⑧ 樹 下卷 八 戊子 傑
- ⑨ 樹 下卷 九 方
- ⑩ 樹 下卷 十 悦 安撫賈侍郎捨
- ⑪ 樹 下卷 拾 堯 涇
- ⑫ 竹 下卷 十一 陳賜
- ⑬ 樹 下卷 十三 王祐刀

「⑫竹 下卷 十一 陳賜」は、発注の際の「誤認」による誤配葉か、と思われる。

陳賜は前述の如く、金沢文庫蔵本によれば、全て開元寺版に携わった刻工である。「樹」のクズシ字は、「竹」という「字」のカタチをとることが多く、「竹」と誤られることもある。発注の際に「注文書」の「文字」を誤読したか、とも考えられる。いずれにしても、東禪寺版に開元寺版印造葉が混じったケースであろう。

二、いわゆる混合帖について

☆A開元寺版の破損・磨滅した板本分を東禪寺版印刷葉で補配（いわゆる混合帖）

野沢氏指摘の東禪寺・開元寺版混合帖は、主として開元寺版の破損・磨滅した板本分を東禪寺版印刷葉で補配したケースを呼称して「混合帖」とする（金沢文庫保管本に拠る。「金沢文庫蔵（福州）版一切経について」『神奈川県立金沢文庫保管宋版一切経』所収）が、その一覧は次の通りである。なお、「」内の番号は、『神奈川県立金沢文庫保管宋版一切経』所収「目録」番号、版種の別も同「目録」による。

金沢文庫保管

書陵部蔵

887〔同〕 仏説婦人遇寧經他

東禪寺・開元寺混合版

同經

東禪寺版

950〔同〕 十誦律 卷七

職 東禪寺・開元寺混合版

同經同卷

東禪寺版

951〔同〕 十誦律 卷八

職 東禪寺・開元寺混合版

同經同卷

東禪寺版

952〔同〕 十誦律 卷九

職 東禪寺・開元寺混合版

同經同卷

東禪寺版

953〔同〕 十誦律 卷十

職 東禪寺・開元寺混合版

同經同卷

東禪寺版

964〔同〕 十誦律 卷二十

縱 東禪寺・開元寺混合版

同經同卷

東禪寺版

997〔同〕 十誦律 卷五一

甘 東禪寺・開元寺混合版

同經同卷

東禪寺版

998〔同〕 十誦律 卷五二

甘 東禪寺・開元寺混合版

同經同卷

東禪寺版

1001〔同〕 十誦律 卷五五

甘 東禪寺・開元寺混合版

同經同卷

東禪寺版

1023〔同〕 根本説一切有部毘奈耶 卷一五

去 東禪寺・開元寺混合版

同經同卷

東禪寺版

1025〔同〕 根本説一切有部毘奈耶 卷一七

去 東禪寺・開元寺混合版

同經同卷

東禪寺版

1899〔1901〕 阿毘達磨順正理論 卷七六

操 開元寺版

同經同卷

東禪寺・開元寺混合版

2444〔2445〕

大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經 卷一六 同經同卷

封 東禪寺版

東禪寺・開元寺混合版

2533〔2534〕 大乘八大曼拏羅經他

同經他

陪 開元寺版

東禪寺・開元寺混合版

2554〔2555〕 仏説大吉祥陀羅尼經他

同經他

驅 東禪寺版

開元寺版

合計15帖を数える。本源寺蔵（三聖寺旧蔵）本の同卷同一帖をも掲示して、野沢氏御指摘の『十誦律』卷七の一例をあげるならば、次の如くなる。

本源寺蔵・書陵部蔵

金沢文庫保管

十誦律卷七（東禪寺版）

十誦律卷七（混合帖）

① ナシ

① 林宥

② ナシ

② 亨

③ ナシ

③ 先

④ ナシ

④ 保

⑤ ナシ

⑤ 林安刀

⑥ 傳先 廣東運使寺正會醮捨

⑥ 傳先 廣東運使寺正會醮捨

⑦ 賜

⑦ 賜

⑧ 昌 安撫使賈侍郎捨

⑧ 達

⑨ ナシ

⑨ ナシ

⑩ 傳先 廣東運使寺正會醮捨

⑩ 青

⑪ 方

⑪ 方

⑫ 求

⑫ 求

- ⑬ 安撫使賈□郎捨 泗 ⑬ ナシ
- ⑭ ナシ ⑭ 先
- ⑮ ナシ ⑮ ナシ
- ⑯ ナシ ⑯ ナシ

野沢氏も指摘する如く、東禅寺版の十三世紀初の代表的な補刻葉、即ち「廣東運使寺…」の施財刊記をもった比較的新しい板木が、用いられていることが特長であるが、注目すべきは、第11、12板の如く、刻工名「方」「求」とする葉が共通する点である。恐らく、「方」の第11板と「求」の第12板は、東禅寺版のもので、金沢文庫保管一切経は、この両板も東禅寺板の流用であろう。こうした例の指摘は、今後数を増すことであろう。

金沢文庫蔵本混合帖と当該書陵部蔵本との比較検討を試みる。両蔵の印造時期の差は、わずかに二、三年であり、同一版同一巻同一帖にその間の相違点が認められる場合は、前述の第一章b「金沢文庫蔵本（弘長元年へ1261）定舜将来・高橋秀栄氏指摘」と書陵部蔵本（淳祐十一年へ1251）の補刻記・中村一紀氏指摘）の関係」で扱った東禅寺版『大般若波羅蜜多經』卷六十四のケースをはじめ、少なくない。混合帖の場合も同様に、数点確認できる。

① 先づ、金沢文庫蔵本と書陵部蔵本の混合帖が全く同一補配葉の場合を例として挙げる。

金沢文庫蔵

書陵部蔵

2534 大乘八大曼拏羅經他

同経他

開元寺版主体混合帖

開元寺版主体混合帖

- ① 林□ ① 林志
- ② 林文 ② 林文
- ③ 陳達 ③ 陳陸
- ④ 李光 ④ 李光
- ⑤ 高宏 ⑤ 高宏
- ⑥ 葉中 ⑥ 葉中
- ⑦ 周文「廣東運使寺正會噩捨」 ⑦ 周文「廣東運使寺正會噩捨」
- ⑧ 王廕 ⑧ 王盼

題記：「福州開元禅寺住持伝法賜紫慧通大師了一謹募衆縁恭為」今上 皇帝祝延聖寿文武官僚資崇禄位円成雕造毘盧大蔵」経板一副時紹興戊辰閏八月 日謹題」

⑧ 施財記：「景星院比丘尼賜紫大師志慧謹施長財壹拾貫省彫造／斯経一卷式資亡考葉十八郎妣陳氏大娘尊魂願生淨界」

金沢文庫蔵

書陵部蔵

2445 大方廣文殊師利根本儀軌經卷十六

同経同卷

開元寺版主体混合帖

開元寺版主体混合帖

② 金沢文庫蔵本の混合帖より書陵部蔵本の方に補配葉が更にふえているか、検討すべき場合

染□(黄か) □(紙) 朱文印)

また、每板「法華山寺」朱文印あり。

本源寺蔵本題記：福州東禪等覺院……(略)
書陵部蔵本第5・6板、料紙異なり、印面墨色淡い。

金沢文庫蔵

書陵部蔵

本源寺蔵

阿毘達磨順正理論卷七六

同経同卷

同経同卷

開元寺版主体混合帖

開元寺版主体混合帖

no.1714(東禪寺版)

① 措

① ナシ

① ナシ

② 措

② 措

② 不明

③ 措

③ 措

③ ナシ

④ 措

④ 措

④ 不明

⑤ ナシ

⑤ ナシ

⑤ ナシ

⑥ 賈侍郎捨酒

⑥ 賈侍郎捨酒

⑥ 賈侍郎捨酒

⑦ 生

⑦ 生

⑦ 生

⑧ 達

⑧ 達

⑧ ナシ

⑨ 達

⑨ 達

⑨ ナシ

⑩ ナシ

⑩ ナシ

⑩ ナシ

⑪ 達

⑪ 達

⑪ ナシ

⑫ 達

⑫ 達

⑫ ナシ

⑬ 達

⑬ 達

⑬ ナシ

金沢文庫蔵本題記：福州開元寺住持伝法慧海大師……

(略)

書陵部蔵本題記部分三行刷印無く空白(紙背)：「開元経局

③ 金沢文庫蔵本(開元寺版主体)混合帖の東禪寺版補配葉が開元寺版の補刻葉にあらたまっている場合

金沢文庫蔵

書陵部蔵

2554 大吉祥経他

同経他

開元寺版主体混合帖

開元寺版

① □ □ □

① 揚宗

② 郭仲

② 郭仲

③ 呉才

③ 呉才

④ 石老

④ 石老

⑤ 林森

⑤ 林森

⑥ □ 中

⑥ 阮中

⑦ 石右

⑦ 石右

金沢文庫蔵本題記：福州東禪等覺院……(略)

書陵部蔵本題記：敷文閣……(略)……勸縁福州開元禪寺

住持慧通大師了一題

金沢文庫保管本は、第2板以下第7板まで、開元寺版であるが、第1板に東禪寺版を混入した為、題記が「福州東

禅等覚院…」となり、「金沢文庫」目録によって、「東禅寺版」と分類されたものである。

④ 金沢文庫蔵本要検討の帖：一例（金沢文庫本未見）

金沢文庫保管本は未見であるが、次の如きケースは、おそらく開元寺版に混入流用された東禅寺版の一葉である可能性が高い。

本源寺蔵	書陵部蔵	金沢文庫保管
1262 根本説一切有部	根本説一切有部	1031 根本説一切有部
毘奈耶卷第二十二而	毘奈耶卷第二十二而	毘奈耶卷第二十二而
(東禅寺版)	(東禅寺版)	(開元寺版) ↓ (混合帖)?
① 良	① 良	① ナシ
② (虫損不明)	② 朱	② 陳章
③ (シ) 不明	③ 賈侍郎捨 江茂	③ ナシ
④ (シ) ナシ	④ ナシ	④ 花
⑤ 賜刀(1・2)	⑤ 賜刀	⑤ ナシ
⑥ 寔	⑥ 寔	⑥ 与
⑦ 賜刀	⑦ 賜刀	⑦ 賜刀
⑧ (虫損不明)	⑧ 浚	⑧ 林小
⑨ 榮(1・2)	⑨ 榮	⑨ 亨
⑩ 王青	⑩ 王青	⑩ ナシ
⑪ ナシ	⑪ 采	⑪ 寧
⑫ ナシ	⑫ ナシ	⑫ ナシ

⑬ 俊	⑬ ナシ	⑬ ナシ
⑭ ナシ	⑭ 浚	⑭ 仲?
⑮ ナシ	⑮ ナシ	⑮ 逸
⑯ 十六	⑯ 十六	⑯ 逸
尾	尾	尾

参考として、東寺蔵開元寺版の例を挙げて、東寺蔵本にも、開元寺版に東禅寺版の一板一葉の補配流用の行われていたことを、指摘しておく。

東寺蔵	大寶積經卷第五十一 (開元寺版)
① 住閩清仁王院比丘処瑛捨 友	① 住閩清仁王院比丘処瑛捨 友
② 付先刊	② 付先刊
③ 住閩清仁王院比丘処瑛捨 友	③ 住閩清仁王院比丘処瑛捨 友
④ 付先刊	④ 付先刊
⑤ 住閩清仁王院比丘処瑛捨 文	⑤ 住閩清仁王院比丘処瑛捨 文
⑥ (〔〕)〔記〕カ	⑥ (〔〕)〔記〕カ
⑦ (〔〕)〔記〕カ	⑦ (〔〕)〔記〕カ
⑧ 右刊	⑧ 右刊
⑨ ナシ	⑨ ナシ
⑩ ナシ	⑩ ナシ
⑪ (〔〕)〔記〕カ	⑪ (〔〕)〔記〕カ
⑫ 記	⑫ 記

⑬ 廣東運使寺正曾噩捨」の位置が、重要な情報をも

<p style="text-align: center;">廣東運使寺正曾噩捨</p>	<p style="text-align: center;">(第2・3・4面省略)</p>			
--	--	--	--	--

たらず。「⑬ 廣東運使寺正曾噩捨／文」は、13板の第1面の第3行と第4行間の余白（一応、柱の位置に当たる）中央に刻されている。管見に入った東禪寺版の補刻葉の内、「廣東運使寺正曾噩捨」を配する場所は、ほぼ每板第1面と2面の間の、やや空間の幅が広くなった（折目を配慮した行どり）部分の下方と決まっている。ちなみに東禪寺版は、一板一紙六面が基本で、ままた、一板一紙五面を混じる。従って、この13板第1面の真中にくるケースは、特異なケースであり、何らかの理由を考慮しなければならない。留意すべきは、第5面の3行迄、界高を同じくし、印面の具合も連続しているが、第5面4行目から、界高・印面の具合も異なる。明らかな別版に移行していることである。

おそらく、『開元寺版』の『大寶積經』卷五十一と東禪寺版の同経同巻とに認められる冒頭の題記3行分の有無による「ズレ」が惹き起こした特異な例とすべきかもしれない。

次に東寺藏東禪寺版の例を一例挙げておこう。

東寺藏

大般泥洹經卷第三（東禪寺版）

① ナシ

② ナシ

書陵部藏

大般泥洹經卷第三（開元寺版）

① 陳得

② 吳浦

③	ナシ	③	蔡宗
④	ナシ	④	王小
⑤	ナシ	⑤	周才
⑥	ナシ	⑥	王和
⑦	ナシ	⑦	程亨
⑧	ナシ	⑧	林宗
⑨	ナシ	⑨	丘甸
⑩	ナシ	⑩	葉閏
⑪	ナシ	⑪	林通
⑫	ナシ	⑫	丁明
⑬	ナシ	⑬	陳堯
⑭	鐘老(1・2)	⑭	鐘老(1・2)
⑮	ナシ	⑮	王細
⑯	ナシ	⑯	郭寔
⑰	ナシ	⑰	郭華
⑱	ナシ	⑱	丁助
⑲	ナシ「鄭仁印造」印(4面3行)	⑲	鍾汝

この場合は、第14板に、一板分の開元寺版が補刻流用されたもの、と考えられる。

☆B東禪寺版の破損・磨滅した板木分を開元寺版印刷葉で補配(いわゆる一種の混合帖)と認めるべき事例

本源寺蔵『別訳雜阿含經』卷十九は、東禪寺版九板に開

元寺版5板を混じり流用したケースであり、後の印造では、第1板至第5板が東禪寺版の代表的補刻葉(「廣東運使」に改まっている。本源寺蔵本の印造以降に「廣東運使寺正曾噩」の捨財に基づいて新たに補刻葉を雕したことがわかる。「廣東運使寺正曾噩」の捨財の補刻例でも、おおよそ、刻工名「付先」の補刻のケースが、先行する傾向にある。

『別訳雜阿含經』卷第十九 淵

本源寺蔵(東禪寺版主体) 書陵部蔵(開元寺版) 金沢文庫保管(東禪寺版)

通番1063 題記：三行空白 題記：三行空白 通番669 題記：東禪寺

①	老(破損不明)	①	老四十一	①	ナシ
②	選	②	選	②	琮②廣東運使寺正曾噩捨
③	鄭英	③	鄭英	③	ナシ
④	郭正	④	郭正	④	仲④廣東運使寺正曾噩捨
⑤	王景全	⑤	王景全	⑤	ナシ
⑥	昌/安撫使賈侍郎捨	⑥	浦	⑥	昌/安撫使賈侍郎捨
⑦	ナシ	⑦	盈	⑦	ナシ
⑧	付先/廣東運使寺正曾噩捨	⑧	葉盛	⑧	付先/廣東運使寺正曾噩捨
⑨	中	⑨	子	⑨	中
⑩	中	⑩	免	⑩	中
⑪	中	⑪	免	⑪	中
⑫	求	⑫	彬	⑫	求
⑬	鄭俊/安撫使賈侍郎捨	⑬	浦	⑬	鄭俊/安撫使賈侍郎捨

- ⑭ 安撫使買侍郎捨道
- ⑮ 以下欠
- ⑮ ナシ
- ⑮ 葉文刀
- ⑮ 安撫使買侍郎捨道

☆C開元寺版の破損・磨滅した板木分を補写による補

(配)

東寺蔵の開元寺版五例を挙げる。

東寺蔵

度世品経卷第一 (開元寺版)

- ① 王仲
- ② 林通
- ③ 陳演
- ④ 王和
- ⑤ 陳立
- ⑥ 陳黙

⑦⑧⑨ 6面1紙、〔補写〕中国宋人による、料紙は他と
共紙、⑦4面裏に単枠朱字印「開元経局」(2。8×2。8
糲)、⑧5面裏にも同じ朱印

- ⑩ 陳堯
- ⑪ 高選
- ⑫ 周元
- ⑬ 卓免
- ⑭ 蔡清

東寺蔵

度世品経卷第二 (開元寺版)

- ① 程亭
- ② 孫永
- ③ 蔡宗
- ④ 王立
- ⑤ 吳浦
- ⑥ 林添
- ⑦ 王廕
- ⑧ 葉閏

⑨ 6面1紙、天地横墨界線、〔補写〕、宋人手、5面裏に

「開元経局」朱印

- ⑩ 陳富
- ⑪ 李完
- ⑫ 王康
- ⑬ 林元
- ⑭ 王確
- ⑮ 郭寔
- ⑯ 蔡宥

東寺蔵

度世品経卷第三 (開元寺版)

- ① 陳晶

② 6面1紙、〔宋人ノ手、補写〕、共紙黄染竹紙、5面裏
に「開元経局」朱印

- ③ 周遂

④ 6面1紙、〔宋人ノ手、補写〕、共紙黄染竹紙、5面裏
に「開元経局」朱印

⑤ 6面1紙、〔宋人ノ手、補写〕、共紙黄染竹紙、2面裏
に朱印あるか、上2段分かなり悪

- ⑥ 林厚

⑦ 6面1紙、〔宋人ノ手、補写〕、共紙黄染竹紙、5面裏
に「開元経局」朱印ナシ

- ⑧ 陳立
- ⑨ 傳及
- ⑩ 李完
- ⑪ 王康
- ⑫ 張周
- ⑬ 程亭
- ⑭ 蔡青
- ⑮ 蔡宗

東寺蔵

度世品経卷第四（開元寺版）

① 林宗 ② 呉濱 ③ 鄭習 ④ 丁宥 ⑤

林遠、4・5面間に「」墨丁風の
もの ⑥ 陳得 ⑦ 王立

⑧ 6面1紙、「宋人ノ手、補写」、共紙黄染竹紙、5面裏
に「開元経局」朱印

⑨ 陳通 ⑩ 葉閏 ⑪ 林添 ⑫ 鄭才 ⑬

林添 ⑭ 王細 ⑮ 鍾老

⑯ 3面1紙と3面1紙を継ぐ ⑰ 王確

東寺蔵

度世品経卷第六（開元寺版）

① 丁宥 ② 蔡大 ③ 孫祐

④ 6面1紙、「宋人ノ手、補写」、共紙黄染竹紙

⑤ 蔡青 ⑥ 王細 ⑦ 林卿 ⑧ 王和 ⑨

鍾老 ⑩ 王確 ⑪ 李貞

⑫ 王蔭 ⑬ 陳先 ⑭ 張周 ⑮ 李完 ⑯

陳富

結びにかえて

☆東禪寺版に関して、次の如き段階を経て（いつれの段階

も、板木の状況によって、入れ替えが可能）、開元寺版の
補刻流用が認められる。

A 破損・磨滅した板木分を書写して補配

B 破損・磨滅した板木分を開元寺版印刷葉で補配（いわ
ゆる混合帖）↓本源寺蔵本・東寺蔵本（1234年以降

1242年以前）

1244・1245年釈道永の東禪寺版補刻勸進活動のも
たらした、補刻の実態は、次の通りである。

☆開元寺版

A 破損・磨滅した板木分を書写して補配↓東寺蔵本
（1244年頃刷印）

B 破損・磨滅した板木分を東禪寺版印刷葉で補配（いわ
ゆる混合帖）↓東寺本（1244年頃刷印）・金沢文庫蔵

本（1261年頃）書陵部（1261年以降1265年以
前か）

本発表以降、公刊された関連主要論文は、以下の通りで
ある。

一、王公祀堂本の現存帖数の増加について、梶浦晋氏
「日本の漢文大蔵経収蔵及其特色―以刊本大蔵経為中心
―」（『漢文大蔵経国際學術研討會論文集』2007年9月
刊 上海師範大学宗教研究所）の貴重な報告があった。

一、中尊寺藏宋刊一切経二百帖の本格的な調査報告が刊行された。破石澄元氏・政次浩氏「中尊寺大長寿院所藏宋版経調査概報」(『中尊寺仏教文化研究所 論集』2号 2005年3月刊)。

一、混合帖について、書陵部藏宋刊大藏経を例にした貴重な報告があった。中村一紀氏「關於宮内庁書陵部所藏福州版大藏経中的混合与印章」(『漢文大藏経国際学術研討会論文集』2007年9月刊 上海師範大学宗教研究所)。

その後の牧野の主な論文・報告、口頭発表を記す。参照願えば幸いである。

論文・報告

①「關於宋版大藏経中“一版五半葉三十行”版片的考察——以伝入日本的《崇寧藏》《毘盧藏》为中心——」(『漢文大藏経国際学術研討会論文集』2007年9月刊 上海師範大学宗教研究所)

②「慶政と聖徳太子信仰——宋版一切経補刻事業を軸に——」(『仏教史学研究』50号 2007年12月刊 王勇・石井公成・藤井由起子の三氏と行った仏教史学会大会シンポジウムの発表内容)

法華山寺多宝塔心柱内への仏舍利納入の事实は、太子信

仰の顕著な“あらわれ”であり、この建築上の特徴的な形式については、竹居明男・三橋正氏の他、先行論文も多い。また、慶政を継いだ良含や遍融・円海らの“遁世上人”の動向は、太子堂・観勝寺、更に金仙院(あえて加えれば、元応寺)をも巻き込んだ“東山”圏における、鎌倉後末期から室町初期に及ぶ“文学”(絵巻なども含む)生産活動に緊密に関連してくる。詳細は別稿参照。

③「書写一切経と宋刊一切経」(文部科学省・平成19年度私立大学学術研究高度化推進事業学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」平成19年度 第2回公開研究会 2007年10月)

最後に本稿は主として科学研究費特定領域研究(A)「東アジア出版文化の研究」に分担参加して行った二〇〇三年迄の東寺藏宋刊大藏経調査の成果に基づくものであり、当時、閲覧・調査並びに研究発表公刊にご高配を賜った東寺当局に改めて深甚の謝意を表するものである。

また、繰り返しになるが、学内学術誌への再録という形をとることに對して大方の御寛恕を乞う次第である。

(まきの かずお・実践女子大学教授)